

「日々の理科」(第2563号) 2021,-7,20

「理科は教材研究がすべて」

(東洋館出版社)の出版

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「日々の理科」の配信をきっかけに、このたび、東洋館出版社より、「理科は教材研究がすべて」を出版していただきました。筑波大学附属小学校教諭で、友人の辻健先生との共著です。「あの」露木和男先生にも特別寄稿をいただきました。今回は、その前文「はじめに(田中筆)」です。



田中さんには子どもが「見えている」のです。
子どもの本然の願いを読みとっているからこそ、
このような教材が生まれてくるのでしょう。

露木和男氏の特別寄稿より

月刊誌「理科の教育」の人気連載「教材研究一直線」が待望の書籍化!



「はじめに」

～再度、教材研究のスタートラインに立ってみる～

昨今の教師の仕事の業務内容は、非常に多岐に渡っています。そもそも教師の仕事は、自身の感情をコントロールしつつ、模範的態度を要求される、いわゆる「感情労働」の典型と言えます。そんな中、日々押し寄せてくる膨大な量の仕事に、精神的にも疲弊しきつ

ている方が多いのではないのでしょうか?当然、教師にとって最も重要な仕事であるはずの「教材研究」が後回しになったり、不十分になっているはず。特に理科の授業では、それは致命的なことでしょう。私もまさしくその状況に陥っていました。

「教師にとっても、子どもたちの学校生活においても、授業こそが命!その為には再度、教材研究のスタートラインに立ってみよう!」と一念発起したのは約7年前でした。自分自身の学びをふり返り、多くの仲間と共有したいと思い、メールマガジン「日々の理科」の配信も始めました。日々の自然観察、教材研究、実践記録などの記録を、理科の先生、大学の先生、学生さんなど(現在読者約500名・約2500号)に、元日から大晦日まで欠かさず発信しています。その中から反響の大きかった記事を、「理科の教育」(東洋館出版社)の「教材研究一直線」というコーナーに掲載していただく好機にも恵まれ、現在約50本の連載となっています。その後、その雑誌の内容を合本(単行本)にする話が具体化し、数回のミーティングの末、出版が決定しました。

この本は、いわゆる「実践ノウハウ本」ではありません。今後のご自身の教材研究のヒントをつかんでいただきたいと思っています。もちろん、内容をそのまま授業で使っていただくのも良いと思います。その上で、問題点や改善点を見出していただき、共に「教師の学び」を共有できれば、一番嬉しく思います。

出版にあたっては、各実践の「ひと工夫」をご執筆いただいた、筑波大学附属小学校の辻健先生、「特別寄稿」をご執筆いただいた、元早稲田大学大学院教授の露木和男先生、実務で大変なご尽力をいただいた東洋館の上野絵美さんをはじめ、多くの方に大変お世話になりました。ここに、心より御礼申し上げます。

2021年7月 小石川自宅にて

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

=====

書は8月に出版予定ですが、東洋館出版社のホームページで、すでに購入予約を受け付けているようです。どうぞご覧になってください。

[東洋館出版社購入予約のページ](#)

<https://www.toyokan.co.jp/products/4369>